6．人間観

6－1．人間の分類

6－1－1．性と年齢による分類

ヘカチ　hekaci　「子供」「男の子」

［山崎シゲ氏］

6－1－3．身分・家系による分類

タカミ・ヨシジロウという人は、有力者で、今やっているタコの漁法（化け縄）を開発した人だ。「舟魂（ふなだま）さん」の祭のときには、この人の家に連れられていった。まずニシパ　nispa　といえば、この人のことだ。「タカミのおっきいじい」と呼ばれていた（繁田ミツ氏の父親はタカミ氏の弟で、「ポンおと」と呼ばれていた）。この家は大きな家で、いつもわらじを脱ぐ人、居候がいた。浪花節語り、祭文（さいもん）語りもよく泊った。

［山崎シゲ氏］

岡田の土人学校と呼んでいたアイヌの学校に道庁や支庁から人がくると、まごじいちゃんの家に来ていた。そういう人は必ず、まごじいちゃんの岡本ヒタクヌ、古海チューキチ、沢田セイタロウ、古海サナスケさんの家を訪れたものだ。

［相川コト氏］

6－2．身体部位名称

頭　パケ　pake

頭が良い　パケ　ピリカ　pake pirka

口チャロ　caro

まつげが長い　シクラプ　タンネ　sikrap tanne

いびきをかく　エトロ　etoro

手　テケ　teke

お腹が大きくなる　ホニポロ　honi poro

おならをする　オプケ　opke

膝　コクカバケ　kokka pake

イキヤ　コクカパケ　ウプしたハイヨ　ハイヨ　ikiya kokka pake up　した　hayyo hayyo

「例の膝の腫れ物がやぶれた。痛い痛い。」

足　チキリ　cikir

［相川コト氏］

テケ　teke　「手」
チキリ　cikiri　「足」
コッカパケ　kokkapake　「膝かぶ」

［山崎シゲ氏］

６－４．身体の世話

６－４－１．入墨・文身

嫁に行く前に口を染める。静内なんかでは、唇の端があがるが、様似では、あまり唇の端が上にあがらないようにする。手にも入墨をする。手の平から一の腕までにかけて施す。

［相川コト氏］

６－４－２．髪型と髪の手入れ

女性は、髪の毛をまん中から左右に分けて手拭を巻く。葬式の時には、手拭をとり、髪を前に垂らす。

［相川コト氏］

６－４－３．病気と治療

私たちが体が弱かったので、まごじいさんは、お膳にいっぱいシコロの実とか、何の葉っぱだか、木削ったものなど、火の神にくべてお願いしていた。お酒もやらないから、カミイノミ　kamuynomi（祈り）とは違う。ちょっとずつ火にくべる。あとは外に持って行ってイナウ立てるヌサに収める。火の神をアペカムィ　ape kamuy　というが、この儀式をアイヌ語で何と呼んでいたのか知らない。２ヶ月に一回は、やっていた。病気にならないようにとやっていた。

［相川コト氏］

６－５．人の一生

大正５年、様似町岡田生まれ。旧姓は、岡本。岡田には、岡本姓が多い。岡本惣吉、エイハチなど。エイハチさんとは親戚らしい。

母方のまごじいさん（祖父）は、岡本ヒタクス、まごばあさん（祖母）は、岡本ソンノマツという。父親は、十勝広尾出身の人で、出征前に結婚していたが、戦争から帰ったが事情があって広尾には帰らず、日高にいた兄弟を頼って様似に来て、岡本家に婿入りした。母親の岡本ウエコは、私が２歳の時に亡くなったので顔も知らない。岡田のまごじいさんとまごばあさんの所で18、19歳ころまで育てられた。父親は、岡田に住んでいたが、自分の母親の死後にできた、腹違いの弟や妹がいた。私が長女だ。後に西町のおば（ヒタクヌの姉娘が西町の岡本へ嫁いだ）の家を継いで現在にいたっている。

［相川コト氏］

父親（沢田サンゴロウ）は、和人で様似の田代（タシロ）の人だ。すぐに母親が亡くなり、伯母のもとにやられた。学校に入るとすぐに和人の家に奉公に出されたのでウタリのことは知

らないで成長したそうだ。母親はウタリで、杵臼（キネウス）に生れた。繁田ミツ氏は私の従姉妹である。

母方の祖母は、様似で産婆をしていた。富菜アリワノという名前であった。私は体が弱かったので、病気をするとこの母方の祖母の元にやられて看病してもらった。ゲンノショウコのクスリを飲ませられたことを覚えている。

［山崎シゲ氏］

６－５－６．葬礼と先祖供養

女の人は急に親戚の人が、たとえば首吊りして死んだり、海で死んだりしたときにホーイホーイと危急の声をあげる。男は刀をもって声を出す。

自分が見た例では、死人は家の中に入れ葬式を出す。死体を家から出すときには、裏の戸口から出す。玄関からは出してはいけない。死体をキナ　kina（ござ）で包んでそれを箱に入れて担ぐ。墓標は、男と女が数人ずつで運ぶ。必ず右肩で担ぐ。女が前で男が後ろだ。墓地へ行く途中で、右肩から左肩へ移したりしない。途中で休む場所と回数が決まっている。休んでいるときに親戚の女の人が箱につかまって泣いていた。

墓地につくと男が３人くらい女が６人くらいで交替で泣きながら墓標を刺す。男の墓標は、Ｙ字型で、女の墓標は、十字型で端に黒い切れがさげてあった。

墓地から家に帰ると小屋(カシ　kas)を建てて一かまど住めるくらいに、壁も物置もつくり、炉をつくってイナウを立てて、その中に村長など２・３人が入る。それより多くの人は入れない。最後に火をつけて燃やす。その時、女の人がウオーイウオーイ、男の人がオホホホーイと声をあげた。

寿命で死んだ時も、事故で死んだときも、男でも女でも小屋を建てて送るということだ。子供の場合には、家は送らない。

粉の団子をつくり、あずきのあんこをまぶしてヨモギの枝に５個ずつ団子を刺して皆に分ける。食べきれないので団子をドングイ(イタドリ)の葉に包んでたいてい家に持ち帰る。家の中で団子を食べるときには、炉より下手で食べる。炉の方へはみ出して食べては行けないと言われた。

法事の時には、家族のみでおこなう。家の中でカムィノミし、外でイチャルパを行う。イチャルパの場所は特に決まっていない。イナゥ、団子をつくり、お菓子や酒を捧げる。

［相川コト氏］

６－８．交易・通婚・戦争

まごばあちゃんの親戚の家に魚をもらいに来た。岡田の人たちがスケソ漁（刺し網）の手伝いに来て生でもらって帰り、家で干す。

鵜苫（ウトマ）は、漁業の町だ。岡本姓の人がたくさんいたが、私の親戚ではない。

岡田コタンから鵜苫などの浜に行くときは、煮豆にするササゲ豆（金時豆というのかな）などを土産に持って行った。

［相川コト氏］